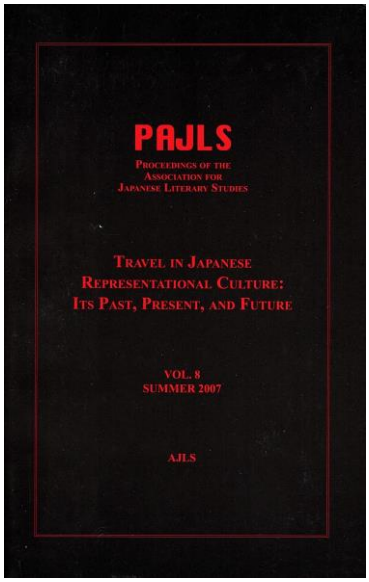
「TOKYO　―　少女の彷徨と旅－林芙美子『放浪記』・倉橋由美子『聖少女』」
“TOKYO—Wanderings and Travels of a Girl, Fumiko Hayashi’s *Hōrōki* (Wanderings)”

江黒清美 Kiyomi Eguro

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 8 (2007): 365–372.



PAJLS 8:
Travel in Japanese Representational Culture: Its Past, Present, and Future.
Ed. Eiji Sekine.

TOKYO　―　少女の彷徨と旅
林芙美子『放浪記』・倉橋由美子『聖少女』
TOKYO—WANDERINGS AND TRAVELS OF A GIRL, FUMIKO HAYASHI'S "*HOROKI* (WANDERINGS)"

江黒清美
Kiyomi Eguro
Josai International University
(城西国際大学)

「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。」（８）で始まる林芙美子（１９０３－１９５１）の『放浪記』[1]は１９３０年（昭和５）に出版された。一方、「いま、血を流しているところなのよ。パパ。なぜ、だれのために？パパのために、そしてパパをあいしたためにです。」（９）といの告白から始まる倉橋由美子（１９３５－２００５）の『聖少女』[2]は１９６５年（昭和４０）に出版された。ともに唐突な自己表現で始まる日記形式の作品であり、大都市・東京を舞台にした都市文学である。

『放浪記』は関東大震災をはさんだ１９２２年(大正１１)から１９２６年(大正１５)までの混乱期に書かれており、実際に出版されたのは１９３０年（昭和５）である。震災から７年後にあたるこの年には、首都の復興計画である帝都復興祭が催され、東京の人口は５５０万人を突破し、世界第二位の都市となった。昭和モダン期におけるモダン都市東京の誕生である。

それから３５年後（１９６５）、『聖少女』が刊行された当時の日本は第二次世界大戦での敗戦を体験したものの、前年の１９６４年には東京オリンピックの開催国になるほどの近代国家に成長していた。『放浪記』とは対照的に主人公の少女は自ら赤いポルシェを運転して首都高を走る。この３５年間という歳月はことのほか東京の変動が激しく、取り上げる二作品には戦前と戦後、地方出身者と都市生活者、勤労とモラトリアム、貧困層と富裕層など多くの相反する条件を持つ少女たちのバックグラウンドが浮き彫りにされている。しかし、東京というトポスと少女たちの関係性を探っていくと、以外にも多くの共通言語が見られる。東京都内の地理的移動、心理的移動、ならびに地方から大都市への移動と、大都市から地方への旅、そして自己の記憶をたどる旅などを通してみていくと、都市放浪者としての少女のアイデンティティ、ジェンダー、セクシュアリティが時代を超えて共鳴しあっているからだ。

本論では時代や状況は異なるものの、東京という都市の変動期にあたるそれぞれの時期に、東京の中心部を足で移動し続けた『放浪記』の主人公

---

[1] 新版『放浪記』林芙美子　新潮文庫　１９７９　テクストとして使用。
[2] 『聖少女』倉橋由美子　新潮社版　１９６５　テクストとして使用。

と、主に車で移動した『聖少女』の主人公をとりあげて、都市空間のエネルギーが少女たちにもたらす物理的、心理的作用の意味づけについて考察を試みる。

アイデンティティ形成と路上の少女

昨今、東京や大阪で見られる「路上の少女たち」は、家には帰らずに繁華街の路上で夜を明かす。報道によると彼女たちの家庭は概ね崩壊しており、家族は娘たちが家に帰らないことに大きな危惧を感じていないという。『放浪記』や『聖少女』の主人公たちも家庭崩壊に近い状態で、一人は生活のため、もう一人は自己発見のため、東京という大都市の中心部を彷徨する。『放浪記』の主人公は「家へかえりたくない。一晩じゅう浅草を歩いていたい。」と思うが、『聖少女』の主人公にとって、表向きには自己の荒廃した家庭がさほど居心地の悪いものと受け取られていないようである。一方、「古里を持たない」芙美子ではあるが「母」という有機的な古里があり、その情愛は深い。ただし、義父に対してもまっとうな愛情を感じていたかと思わせながら、最終章では嫌悪の情を顕わにしている。『聖少女』の主人公・未紀の母親は愛情を示す機能を失ったクールな母親であり、父親は母親への冷めた愛情の反動のように未紀を愛するが、尋常な愛しかたとはいえない。複雑な家庭環境の中で二人の少女は自己の記録をノートに綴っていく。

『放浪記』は１８歳から２３歳頃までの芙美子が日記形式に綴った作品である。先にも述べたように、関東大震災を挟んだ混乱の時期であると同時に、芙美子自身の多感な時期でもあった。この作品は完全なノンフィクションではないが、文中で「林さん」と呼ばれ、詩の中でも自らを「芙美子さん[3]」と呼んでいることから、本論では主人公の名前を芙美子と表記していく。また『放浪記』の主人公を少女として捉えるところに懸念があったが、幼少時からの記述の後に 18 歳からの日記が始まるところから、成年に達する前の少女として論を進めていく。

「宿命的に放浪者」である芙美子の旅は、母親と養父に連れられた行商という形で始まる。１８歳で恋人を追って上京した１９２２年（大正１１）から１９２６年(大正１５)までの５年間は、まさに生きるため、食べるための現実的問題による移動であり、そこにはその日暮らしの放浪の日々が断片的に記してある。この放浪が意味するものは、飢えと貧困を伴った地理的移動でもあるが、職場や住居や男たちを転々とする移動でもあり、それらはまた母親の情愛と芙美子の文学的嗜好に基づいたものである。「誰も知人のいない東京　なので、恥かしいも糞もあったものではない。ピンからキリまである東京だもの。裸になりついでにうんと働いてやりましょう」。（２８）　これは道玄坂で母親と露天商を始めた時の芙美子の言葉

[3]「林芙美子という名前は、少々私には苦しいものになってきました」（２９１）、「感化院出の芙美子さん」（３３６）、「芙美子さんはこれきりなのよ」（３４６）

だが、都市の持つ匿名性の気楽さが芙美子をすんなりと東京の商売人に変貌させている。実父も養父も行商を生業とし、幼い頃より生活に機軸のない暮らしをしていた芙美子にとって、路上はそのアイデンティティ形成の場となった。

主人公はよく泣き、よく怒り、そしてよく歩く。四谷から東中野まで夜店を見ながら下駄履きで歩いて帰る。一日に２０キロ歩くことも厭わない。上京の翌年にあたる１９２３年（大正１２）９月１日、新宿に住んでいた芙美子は関東大震災を体験する。東京に出ていた両親の安否を確かめるため、真夏の日照りの中を二升の米と干しうどんとタバコを背中に背負い、本郷から新宿の十二社まで四里の道を歩く。行き違いになったことが分ると、野宿をした翌日また前日来た道を歩いて戻る。このとき主人公は「すべては天真爛漫にぶつかってみましょう」（１８１）と通りがかりのトラックをつかまえて、新宿・若松町から御茶ノ水・順天堂前まで乗せてもらう。そこからまた本郷まで歩き、やっと義父に再会する。銀座で広告受付係をしていた時は、八十銭の日給をもらうと本郷まで歩いて帰っていた。新聞社や出版社に歩いて原稿を持って行き、断られてはまた歩いて戻り、再び出向く。そういうことをさらっと書く。

『放浪記』の構成は複雑になっており、日記の一部から三部までが時系列に記されているのではなく、五年間の日記を三回に渡って抜粋して刊行[4]したため、芙美子が東京中をいつも歩いてまわる印象がある。

芙美子が街中を歩きまわると同時に住居も職も転々と移動していた１９２０年代は、カフェ文化の隆盛期であった。また地方から東京への居住者が急増し、単身者のための下宿や集合住宅の需要が増え、アパートが建ち始めたのもこの時期である。芙美子が牛鍋屋からカフェの女給に職変えしたり、住居を頻繁に変えることができたのも、こうした大都市の居住環境変化と、地方から来た女性が簡単に職につくことができるようになったカフェの誕生あってのことだった。賃貸の部屋とカフェの女給の仕事が地方から都会に出て来た女性の個人の生活空間を成り立たせたといえる。東京という都市が少女の放浪を支えていくだけの社会的条件を整備しつつあったこの時代に、そのパイオニア的存在であったのが芙美子である。

１９２０年代のカフェ文化について海野弘[5]が明らかにしているように、「カフェの空間において男の見ている都市と女の見ている都市は決して一致しないこと」を芙美子が学び、「男によってとらえられた東京ではなく、女の東京が発見」されるべく芙美子は「女たちの都市論『放浪記』を書いた」（２２３）のである。このとき芙美子の視点が女性の領域だけに留まっていたのではなく、男性の領域に踏み込んだ、あるいは彼女が持つ

---

[4] 昭和5年改造社より『放浪記』、同年『続放浪記』、昭和14年新潮社より『放浪記決定版』出版。　昭和54年新潮社より新潮文庫『新版放浪記』出版。

[5] 海野弘『モダン都市東京　日本の1920年代』中央文庫1988

男性的なパースペクティブと行動力を通して『放浪記』は成立したのである。

優れた都市文学論である『林芙美子の昭和』の中で川本三郎[6]が指摘しているように、作家として成功した林芙美子が締め切りに追われ、煮詰まった時に逃げ出していくのは、「東京の路地」であり、「都市全体が<自分だけの部屋＞」になっている。芙美子の作家としてのアイデンティティも街中を歩きながら路上で育まれたのである。

そして男もよく変わった。尾道時代の恋人・岡野、俳優の田辺、本郷の学生、詩人の野村、画学生の手塚と、同棲と別れを繰り返してはいつも男に貢いでいる。「貞操のない私の体」（６５）、「一直線に堕落した女よ！」（１１７）、「男が欲しい」（２８９）、「食欲と性欲！・・・食欲と性欲！私は泣きたい気持ちで、この言葉を噛んでいた」（１５４）と、自らのセクシュアリティにも極めて正直で、直截的である。お金がなくなると、「誰かこんな体でも買ってくれるような人はないか」（３４）と破れかぶれになるが、それは口だけで、体を売ることだけは避けてきた自らの矜持は最後まで崩さない。

芙美子が社会に抱いていた義憤は、時に男たちへの私憤となって顕れたが、「男に食わしてもらう事は、泥を噛んでいるよりもつらいことです」（５１）と、逆に男たちの生活を支え、母親を守り、作家となるために底なしのその日暮らしを続けていく。しかし、孤独と貧困からくる閉塞感や悲壮感はなく、頭の上はいつも空にぬけている。がむしゃらで、本音をむき出しにした主観的日記は、生命力に満ちて勢いがあるせいか、不幸がそのまま伝わらない。森英一[7]は「生と性の放浪」の繰り返しが作品を暗くしていないのは、「主人公の楽天的性格」もあるが、何より「物を書き、読む慰み」、つまり「文学に執着する心」があったからではないかと指摘し、その「成長し続ける姿」に読者は魅了されるという。

「一切合財が、何時も風呂敷包み一つの私」（２４７）であり、「野良犬のように彷徨」（４９）し、「酒に溺れ」（８２）、「泥棒になる」（８０）か、あるいは「生きる事がこんなにむずかしいものならば、いっそ乞食にでもなっていろんな土地土地を流浪して歩いたら面白いだろうと思う」（５６）、という芙美子のジェンダーはほとんど男である。

セクシュアリティ解放と車上の聖少女

『放浪記』の主人公は当時の女性が都会で生きて行くことに対して、圧倒的不利をもたらす社会への義憤がおり込められているが、『聖少女』の未紀の場合は私憤である。倉橋由美子が描く少女は衣食住と教育が満ち足りた上で、少女の自我が超越した欲望主体となりえることを示す、つまり近代文学上における近代的自我を男が表明し、獲得していったように少女

---

[6] 川本三郎『林芙美子の昭和』新書館2003

[7] 森英一『林芙美子の形成　その生と表現』有精堂　１９９２

に軽々と「自由」を与えている。それは 40 年前の日本で、東京というトポスで、少女が持ちえる自由と超越した自我を保つには、セクシュアリティという欲望主体のパトスが必要項となることを意味する。

貧困と孤独を抱え田舎から東京へ出て来た芙美子と違って、いわば東京在住の裕福なお嬢様である未紀が生きる困難は、自らの核（アイデンティティ）が何であり、それとどう向き合い、折り合いをつけていくかという苦悩でもあった。というよりも、高原英理[8]が『少女領域』の中で鋭い分析をしているように、「自由と高慢、相矛盾するこのふたつが少女型意識体にとっての最大の課題」（１８８）であり、加うるに「自己愛」の構築と欺瞞的「自由」を容認する書き手の「解放」の四位一体が聖少女を作り出す成分表ということである。そう、聖少女は自己矛盾に悩んだりはしないのだ。

日記形式のノートには自己解明後、どの方向に行くのかという謎解きのストーリーがある。自動車事故で記憶を失った少女・未紀が過去のノートを頼りに記憶を甦らせようとするが、その手助けをする青年が語る未紀についての記述部分の中に、未紀の日記ノートが入れ子式にはいっている構造である。主人公が１６歳から２２歳までの記録であるが、時間経過が前後するなど、『放浪記』と同じような複雑な構成となっている。

「聖少女」が棲息した『放浪記』から３５年後の東京は東京タワーの完成後、オリンピック開催に伴う首都高速道路や公共の施設など街の整備化が進んだ。１９４５年の敗戦という予想だにしなかった結果は、憲法 9 条による不戦宣言をもたらし、それとともに始まった民主主義により男女平等が謳われ、それまでの概念をすっかり覆す結果となった。完全な領土化ではなく、天皇制を存続させたことで国民の反米感情が親米感情に変わり、物理的にも精神的にもはばかりながらもアメリカナイズの現象を取り入れようとする風潮があった。語り手となる「ぼく」[9]は UCLA に留学予定の学生で、過去の学生運動への関与からアメリカ大使館の許可がおりず待機中という設定である。ヒロインの未紀はジャズへの造詣が深いが、むしろヨーロッパ的芸術の知識に秀でており、時折アナイス・ニンを髣髴とさせる。

この二人の最初の出会いは虎ノ門の路上である。「ぼく」が仲間たちと銀行強盗を企てたあと、その車に「白い生きものがふわふわと近づいて」（３）きたのが未紀である。その後、未紀は自分の車に同乗していた母親を事故で失い、自らも記憶喪失になることから、記憶再生のための一助として自分のノートを「ぼく」に託す。

---

[8] 高原英理「自己愛の構築―倉橋由美子『聖少女』１９６５」『少女領域』国書刊行会１９９９　所収。

[9] 「ぼく」は村上春樹の小説に登場する「僕」的存在で、自己像の表現においては未紀よりも主人公的存在。

セクシュアリティの解放においても芙美子と同様、「聖少女」のセクシュアリティも放埒だが、その解放のベクトルは軸足を微妙な方向にズラしていき、近親相姦、同性愛へと向かう。日記の中で愛し合う「パパ」は実父であり、のちに未紀が経営する喫茶店が同性愛者の集う場所となり、未紀自身も美少女 M と関係をもつ。

近親相姦はこの作品の大きなテーマであるが、作品に通低する貧富の差、クラスの違いの感覚がそこに大きく反映している。「ぼく」の友人が語る、「貧乏人であのこと以外に娯楽のないやつら」の近親相姦は「穢くて悲惨」だが、ヨーロッパの「上流階級の甘い生活」の中での近親相姦は「最高」で美しいという見解は、未紀と父親、「ぼく」と姉との関係に当てはまる。

UCLA に留学予定の「ぼく」は一見裕福そうだが、この小説では貧困学生という設定で、友人の見解を借りれば、両親のいない姉弟は貧困をこじらせて近親相姦に至ったということである。一方、未紀と父親の関係は＜ブルジョワジーの密かな愉しみ＞として表象されている。強姦に近い形で関係を強いられた「ぼく」の姉はそれ以後一切弟と口をきかなくなるが、未紀の反応は「ぼく」の姉とは全く逆で父親を崇める。ここで重要なことは、その関係の始まりに<合意＞があったかどうかである。概ね強者が弱者に強要する形で始まる近親相姦であるが、未紀には被害者意識はなく、また父親にも加害者意識はない。このことは作者が特殊な少女像を造型していく上で必要不可欠な前提である。

貧富の差に限っていえば、林芙美子は「貧」を極度に語り、倉橋由美子は「裕」を極度語っており、そこに作為的な経済的状況の表現が見られる。例えば、芙美子の場合、「二日も私は御飯を食べない」（２６６）など、あれだけ飢えと貧困を書きながらも太っている。「私の裸は金太郎そっくり。只、ぶくぶくと肥っている。お尻の大きいのは、下品なしょうこだ。うまいものを食べている訳ではないけれど、よくふとってゆく。ぶくぶくによく肥る」（３５３）。また底なしの貧乏暮らしだが、時折、思い立ったように汽車に乗り旅に出る。そこで文学的インスピレーションを受けて帰ってくる。そして、母のいる尾道にもさっと行く。

一方、『聖少女』の未紀がブルジョワであるのは間違いないが、貧困層の設定である「ぼく」が学生運動をしている時期に伊勢丹の水着売り場で男友達と待ち合わせをして、水着を買い、赤坂のプリンスホテルに二人で泳ぎに行くという行為は少し理解できない。60 年代の本物のお坊ちゃまでさえなかなか勇気のいる行動である。このことの真意がどこにあるのかは定かではないが、文脈に沿って事実を語るというよりも、当時の社会風俗[10] を語るほうに重きを置いている感がある。

---

[10] 伊勢丹、赤プリ、高輪プリンスホテル、芝のクレッセント、ミケランジェロ・アントニオーニ、ジーン・セバーグなど、図鑑的固有名詞の羅列は後の田中康夫『なんとなくクリスタル』（１９８０）の登場を想起させる。

高原はこの作品のひとつのテーマともいえる「クラス主義」に言及し、「皆が貧しいまま平等という幻想に自足しているとき、その嘘を暴くことが批判」になり、また平等だと思っている貧民や弱者に格差を告げることが「批判であり、前衛でありえた」のが 60 年代であるとしている。さらに「<差別主義プロパガンダ作品＞であっても、差別原理以外のところに価値を読み取ることはいくらでもできる」（１９２）という指摘は先の矛盾の解消につながる。

「ぼく」が未紀との出会いで、「白いいき物がふわふわ」と表現したように、未紀のイメージは一貫して「白」と「ふわふわ」の掴みどころのないメタフォアで語られる。白いニットコート、白銀の中国服、白いブーツ、白い水着、未紀が身につけるものはほとんどが白である。「白い手」と「白い足のうら」をもつ「白人」のような未紀の「白い仮面」は「ぼく」を凍らせ、記憶を蘇らせてくれた「ぼく」に感謝して、「白いコリーになってあなたのお手をなめさせていただきたいほどです」（２０８）と言う。換言すれば、白色の浮遊感とはどこにも属さない色のない中立的存在、あるいは中性的存在を意味し、それは未紀自身であり、無色な浮遊物の媒体として存在している。自己のアイデンティティを無化し、親にも子にも帰属しない抽象的な存在であるため、さらりと親子の境界を越えることができるということを意味している。未紀が「ぼく」の姉のような反応をしないのはその為である。聖少女のジェンダーは中性であるといえよう。少女は個体として拠って立つところを明確にしないまま、媒体化されて彷徨して行く。それができるのが東京である。東京にはどこにも帰属しないで暮らしていける者や、どんな価値をも受け容れるカオティックな力がある。

体制をすり抜ける少女たち

芙美子が地球に足をつけて生きることを目的に放浪したのに対して、タイヤを介して地面に接した未紀の心理的放浪は自らを浪費することに向けられている。時間の浪費、経済の浪費、性の浪費である。世相という観点から見れば、戦争と大震災は芙美子に貧困と生へのエネルギーをもたらし、それが芙美子の死生観につながっている。戦後の急速な近代化と好景気が未紀にもたらしたものは、豊かさと個別性の助長からくるアンニュイなカウンターカルチャーである。

二作品の少女たちに共通するものは「安定」の欠如と「孤独感」であり、それは芙美子も未紀も少女＝純粋、もしくは従順という構図から大きくはずれて、規範や制度から逸脱しているところに顕れている。水田宗子[11]は男の放浪が「自由な人間のひとつの生き方の形である」のに対して女の放浪は「結婚という制度への定着を拒む」ものであり、「放浪する女とは、結婚という制度によって確保される、家の中という女の居場所、母や妻や

[11] 水田宗子「放浪する女の異郷への夢と転落―林芙美子『浮雲』」　『フェミニズム批評への招待―近代女性文学を読む』學藝書林　１９９５　所収。

娘という女の従来の役割からはみだした女であり、・・・（略）女にとって、放浪とは、結婚の制度の外部に生きることを前提」（３０７）としていると、男と女の放浪の違いについて述べている。

制度内での安定に興味を示さなかった少女たちが、ともすれば崩壊しそうな自らのアイデンティティをかろうじて保つことができたのも、東京という都市が持つ狂気と混沌、ポテンシャルでアノニマスなエネルギーに拠るところが大きい。

本論では場所を東京に限定したが、海外に出て行った少女や女性にも焦点を当て同じような観点から、彼女たちのジェンダー、セクシュアリティ、アイデンティティのゆらぎを検討してみたい。

―参考文献

新版『放浪記』林芙美子　新潮文庫　１９７９
『聖少女』倉橋由美子　新潮社版　１９６５
『モダン都市東京　日本の１９２０年代』海野弘　中央文庫　１９９８
『林芙美子の昭和』川本三郎　新書館　２００３
『林芙美子の形成　その生と表現』森英一　有精堂　１９９２
「自己愛の構築―倉橋由美子『聖少女』」高原英理『少女領域』国書刊行会　１９９９
「放浪する女の異郷への夢と転落―林芙美子『浮雲』」水田宗子　『フェミニズム批評への招待―近代女性文学を読む』學藝書林　１９９５

Fumiko Hayashi’s “Horoki” (Wandering) which begins with “I am a fateful wanderer. I have no home town.” was published in 1930 on the basis of her actual diary. Fumiko’s travels began when she was still a child because her mother and adoptive father were peddling on the road. Although she settled in Tokyo later, she was forced to wander to eat even in is large city. She wrote about her situation “I have been living to survive” energetically with a vivid pen.

In Yumiko Kurahashi’s “Divine Girl” the stage is Tokyo of the 1960s in the midst of an economic boom due to Tokyo Olympics and the story of “I” and a bourgeois lady develops.

I wish to look into mental and physical effect the energy of a personificated Tokyo had on girls with contradicting conditions before and after the war, non-fiction and fiction, poor and rich, and activity and ennui.